

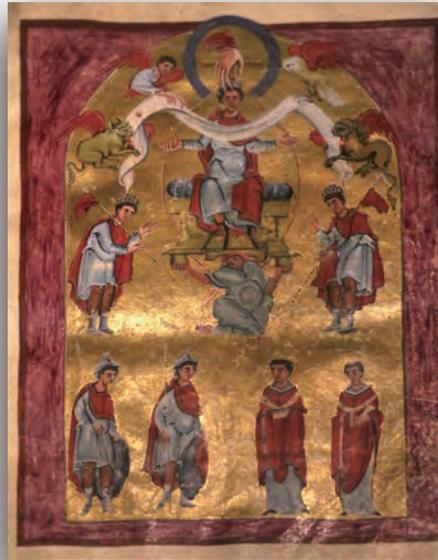
国家形成からみた沖ノ島

儀式のカーニバルと宗教のコンテクストから見た国家形成と支配ー

ウェルナー・シュタインハウス

Werner Steinhaus

広島大学客員准教授



講演の内容

- 国家形成と世界遺産・ドイツ・日本・韓国

- 国家とはなにか — 国家の概念

- 国家形成の過程

- 日本列島の国家形成における宗教と儀式

- 社会構造と支配 — 古墳の被葬者の役割と性格について —
神聖王権、祭司王

- **儀式の力** — 儀式と宗教のコンテクストから見た国家形成と支配 —

- **プライマリー宗教とセカンダリー宗教と沖ノ島の祭祀**

国家形成と世界遺産

ドイツの世界遺産

- 1978年から登録
- 自然遺産3ヶ所、文化遺産43ヶ所
- 教会、城・宮殿、町並み、産業遺産、近代建築、広域的な遺産
- 考古学的世界遺産の登録4ヶ所
- → ヨーロッパの典型的な組み合わせ



国家形成と世界遺産

ドイツの世界遺産

- 1978年から登録
- 自然遺産3ヶ所、文化遺産43ヶ所

記念物の保護と保全は、ドイツの場合州が担当します。

暫定リストへの登録の可能性のある申請は、最初に、関連する州の記念碑的事項を担当する部署と協力して指定されたワーキンググループによって処理されます。

- → ヨーロッパの典型的な組み合わせ

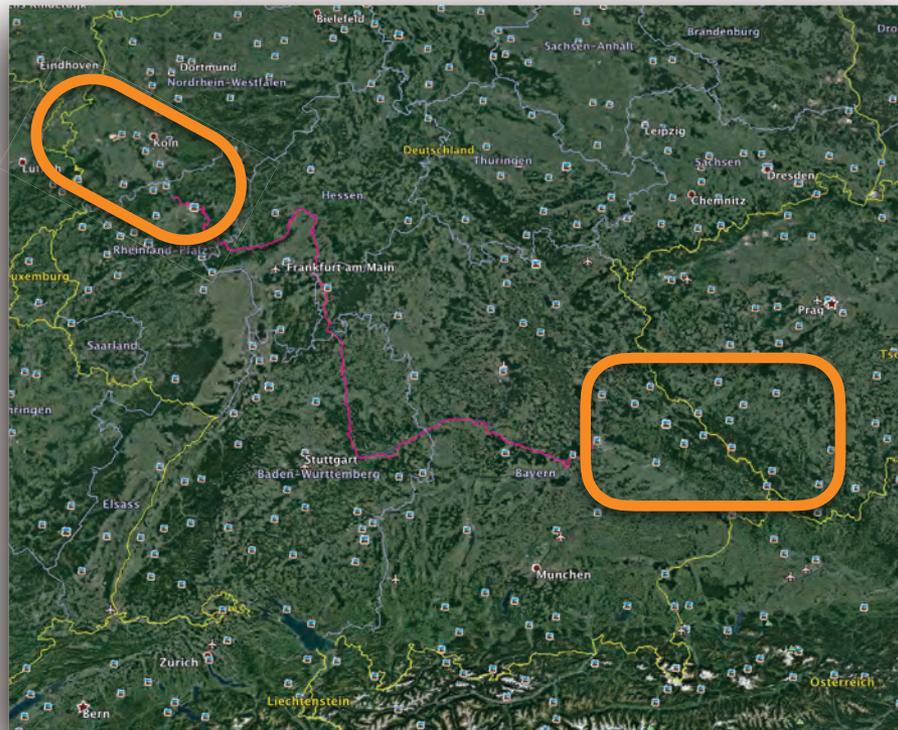


ドイツの考古学的世界遺の4ヶ所

- 2005年登録：ローマ帝国の国境線・(ドイツとイギリス、1997/2005登録、2000ha)・シリアル・ノミネーション・連続性のある国境を越える資産
- 2011年登録：アルプス山脈周辺の先史時代の杭上住居群
シリアル・ノミネーション・(連続性のある国境を越える資産)
- 2017年登録：シュヴァーベンジュラの洞窟群と氷河期芸術
(最古の氷河期芸術を生んだ洞窟群)
- 2018年登録：「ハイトブ(Haithabu)」と「ダンウエルク(Danewerk)
(考古学的な国境地帯・前期中世)

- 選択方策：
➡ 国を超える、保存状況、研究史、学問の上に
代表的な最高クラスの遺跡群

ローマ帝国の国境線（ドイツとイギリス、1997/2005登録、2000ha）



シリアル・ノミネーション

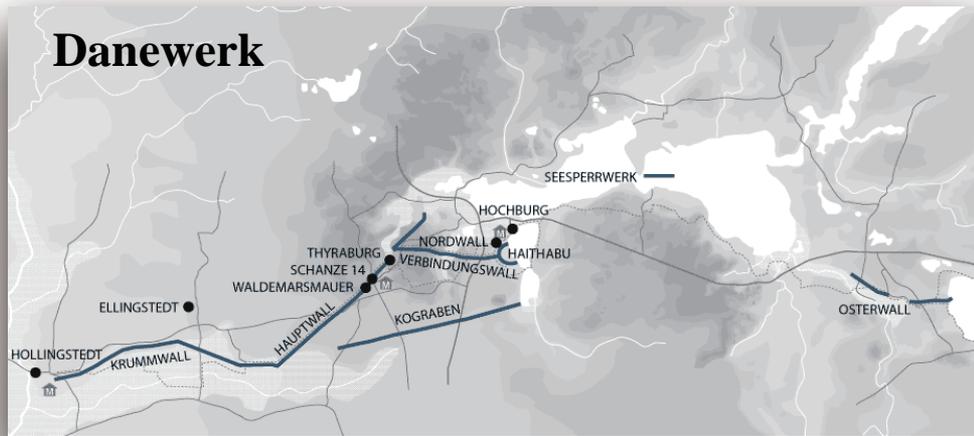
連続性のある国境を越える資産

プロジェクト「ローマ帝国の国境建設」の目的は、

第一に、リーメスが存在するすべての欧州諸国とその地域の施設を統合することです。

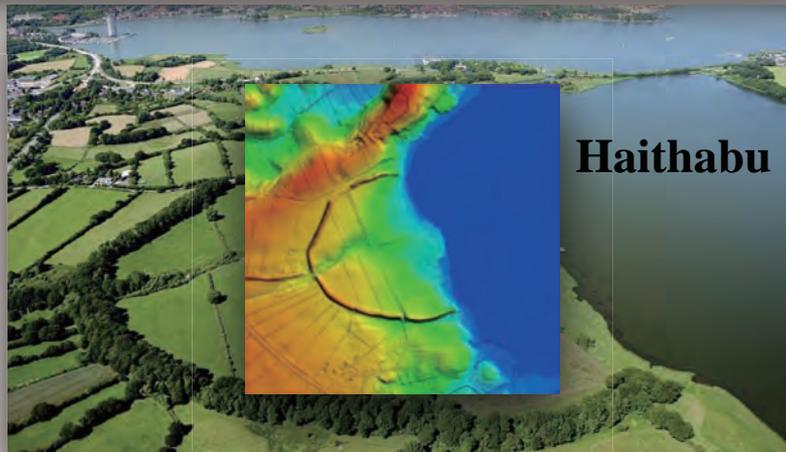
2008年にスコットランドでアントニヌスウォールは記録されました。

「ハイタブ (Haithabu)」と「ダンウエルク (Danewerk)」 考古学的な国境地帯



申請の焦点は、歴史的に重要な国境地帯としてのこの地域の重要性にあります。

紀元後5世紀から12世紀にかけての大陸のキリスト教と北欧の社会の国境の中心



Danewerkは**城壁**であったが、Haithabuは城壁に部分的に関与して、デンマークのバイキングの**重要な集落**である。

Von Alexander Leischner, CC BY-SA 3.0, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=16873741>

日本の世界遺産

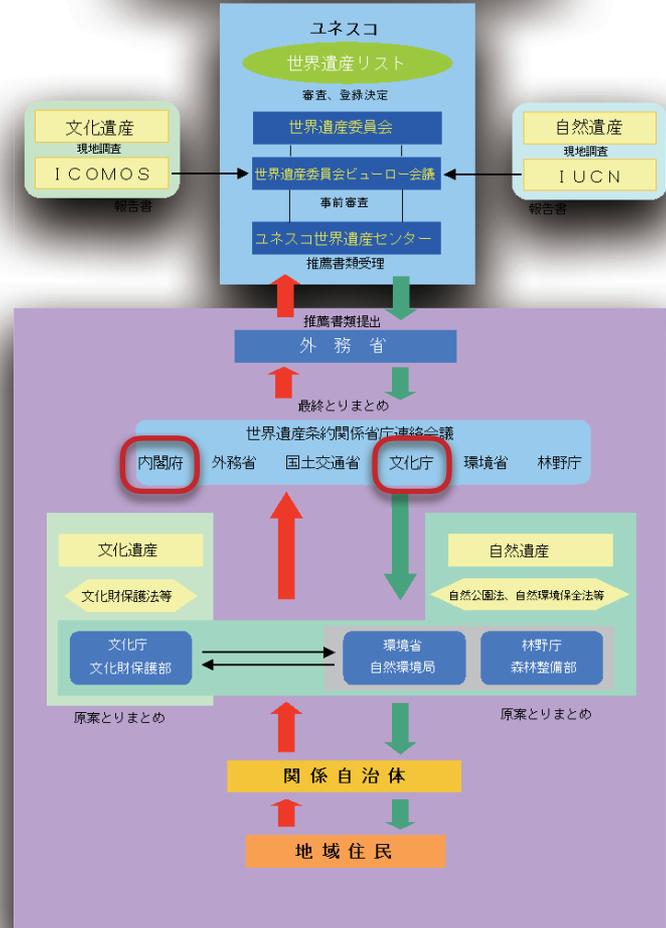
- 1992年から登録
- 文化遺産19件
- 自然遺産4件
- 考古学的世界遺産3件
- 暫定リスト:7件(2019年)
- 問題:近年の日本からの提案はイコモスによる評価が低い → 2008年:平泉の文化的景観は登録されない → 修正した後、2011年登録



日本の世界遺産

「世界遺産」をめぐる政治化される「文化」
「明治日本の産業革命遺産」登録過程の問題

世界遺産登録までの流れ



両国の考古学的世界遺・現状

日本

ドイツ

登録過程

準備の規模

目的

内容

➡ 行政・国家主義

- ➡ 予算と準備”オーヴァーキル”
- ➡ コンサルタント会社問題
- ➡ 大勢の関係者

- ➡ 国・県などの地域おこし戦略
- ➡ 観光客ターゲット
- ➡ 地域アイデンティティ
- ➡ 遺跡保存

➡ 国家形成、基層文化
のストーリー

➡ 専門家主義

- ➡ 準備の規模が小さい
- ➡ カリスマ的リーダーとその
ワーキンググループ

- ➡ 遺跡保存を安定させる
- ➡ 持続可能な観光
- ➡ 連続性のある国境を
越える資産
(シリアル・ノミネーション)

- ➡ 長時間の研究枠組みの上に
- ➡ 遺産よってのストーリー

韓国の国家形成的な世界遺産

➡ 王権
➡ 国家形成
➡ 仏教

- 百濟歴史地域

文化遺産18件韓国中央部西側の山間部に位置する、百濟王朝後期の3つの古都の遺跡。**百濟王朝**は、紀元前18年から紀元660年までの700年近くに及んだ、朝鮮半島最古の王朝の一つ。構成資産は、475年から660年までの王陵、城、城壁、寺院跡など8つの遺跡からなる。中国の都市計画や建築技術、芸術、宗教にかかわる概念を取り入れたこれらの遺跡は、百濟王朝が隣国との交流によって文化的発展の絶頂を迎えた時期を示すものであり、百濟王朝独特の文化・宗教・芸術を表す類いまれな物証である。

- 慶州歴史地域

朝鮮半島東海岸、慶尚北道にあり、**新羅王国**の首都・金城として3～10世紀の間、朝鮮半島の中心地として栄えた。慶州市内外に見られる200余りの緑の丘は1世紀以来の新羅王たちの古墳で、7世紀に半島を統一後、中国の大都市を範として首都を拡大・整備した。仏像、レリーフ、仏塔、寺院跡、宮殿跡など、韓国仏教美術の傑作の数々が驚くべき集中度で保存され、7～10世紀にかけてこの地で花開いたユニークな芸術表現様式を見せてくれる。

沖ノ島

- 『神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群 (2017)
 - 構成8資産のうち、ユネスコの諮問機関が4資産を「除外」するよう勧告したが、世界遺産委員会は逆転で一括登録を認めた。
 - 祭祀考古学的遺産登録
 - 新原・奴山古墳群
- 沖ノ島祭祀を実施した宗像氏らは、5世紀半から6世紀後半にかけて、当時の入り海を望む台地に前方後円墳5基、円墳35基、方基1基の計41基の古墳を築きました。
- 「イコモスは、一連の宗像大社の資産や宗像氏の寄与を示す古墳群の価値は、国家的なものであり地域や世界的な価値とは認められないものとする。」

➡ ストーリー性の問題

沖ノ島の世界遺産の評価基準と国家形成

評価基準 (ii)

- ➡ 建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与えた、ある期間にわたる価値感の交流又はある文化圏内での価値観の交流を示すものである。

評価基準 (iii)

- ➡ 現存するか消滅しているかにかかわらず、ある文化的伝統又は文明の存在を伝承する物証として無二の存在（少なくとも希有な存在）である。

沖ノ島の世界遺産の評価基準と国家形成

→ 交流

評価基準 (ii)

→ 建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与えた、ある期間にわたる価値感の交流又はある文化圏内での価値観の交流を示すものである。

祭祀の変遷を証明し、イニホマタ、アツノ入陸、初瀬平島、日本列島を拠点とする国々がアイデンティティの感覚を発達させた時期に起こり、**日本文化の形成**に本質的に貢献した活発な交流の過程の性格を反映するものである。

→ 崇拝の伝統・祭祀遺跡

評価基準 (iii)

→ 現存するか消滅しているかにかかわらず、ある文化的伝統又は文明の存在を伝承する物証として無二の存在（少なくとも希有な存在）である。

た祭祀が4世紀後半から9世紀末にかけての500有余年にどのように変化したかについて時系列的な記録を残すものとなっている。これらの祭祀では、大量の貴重な奉獻品が島の様々な場所に納められており、祭祀の変化を証している。沖ノ島での直接的な奉獻は9世紀に終わったが、島に対する崇拝は、大島や九州本島から沖ノ島へと開かれた眺望によって例示される「遥拝」とともに、沖ノ島の沖津宮、大島の中津宮、辺津宮という宗像大社の3つの異なる信仰の場における宗像三女神への崇拝という形で継続した。

百舌鳥・古市古墳群

- 「百舌鳥・古市古墳群」にかかる決議概要(1)記載の可否と評価基準

「百舌鳥・古市古墳群」を

- 評価基準(iii)及び(iv)に基づいて世界遺産一覽表に記載する

評価基準 (iii)

- 評価基準 iii → 現存するか消滅しているかにかかわらず、ある文化的伝統又は文明の存在を伝承する物証として無二の存在（少なくとも希有な存在）である。

古墳は日本
また類まれな物証を提供するものが百舌鳥・古市古墳群である。45の構成資産は、この時代の**社会政治的構造、社会的階層差**および高度に洗練された葬送体系を証明している。

評価基準 (iv)

- 評価基準 iv → 歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本である。

百舌鳥・古市古墳群は、古代東アジアの墳墓築造のひとりの顕著な規矩をホリものである。古墳、およびその有形の属性である土像、濠、幾何学的な段築をもち、石で補強した墳丘は、この歴史的に重要な時代における**社会階層の形成**のうえで顕著な役割を果たしたものである。

百舌鳥・古市古墳群

- 「百舌鳥・古市古墳群」にかかる決議概要(1)記載の可否と評価基準

「百舌鳥・古市古墳群」を

- 評価基準(iii)及び(iv)に基づいて世界遺産一覧表に記載する。

- 評価基準 iii

古墳は日本各地に16万基存在するものの、日本古代の古墳時代の文化を代表し、また類まれな物証を提供するものが百舌鳥・古市古墳群である。45の構成資産は、この時代の**社会政治的構造**、**社会的階層差**および高度に洗練された葬送体系を証明している。

- 評価基準 iv

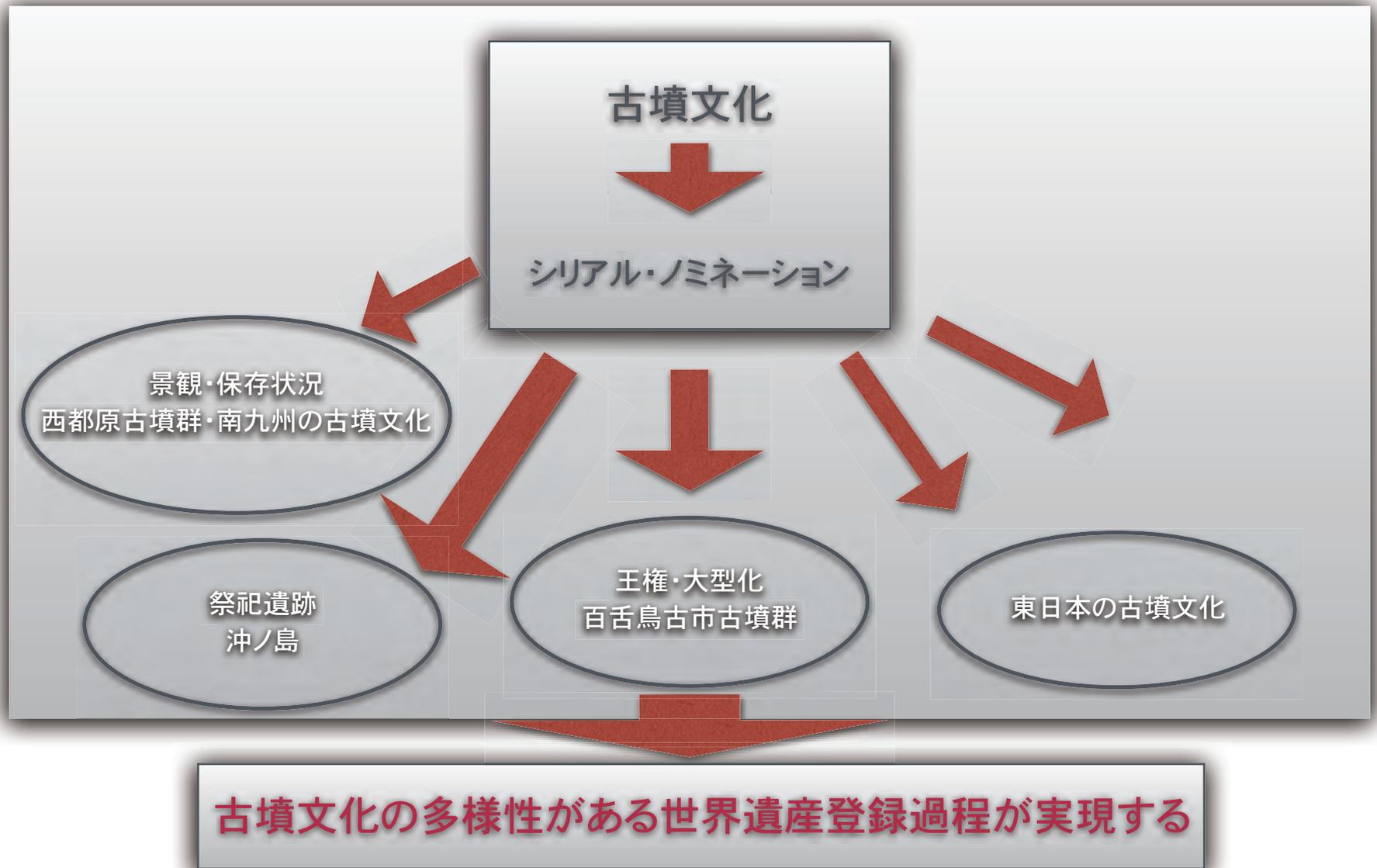
百舌鳥・古市古墳群は、古代東アジアの墳墓築造のひとつの顕著な類型を示すものである。古墳、およびその有形の属性である土像、濠、幾何学的な段築をもち、石で補強した墳丘は、この歴史的に重要な時代における**社会階層の形成**のうえで顕著な役割を果たしたものである。

百舌鳥・古市古墳群

- 2018に百舌鳥・古市古墳群は世界文化遺産登録に決定した。
- 初めて、**本格的考古学的世界遺産**候補者である。
- 古墳群として、現在の都市景観の中に王権の埋葬



世界文化遺産としての古墳文化



講国家とはなにか — 国家の概念

古代日本の国家

- 日本列島の7世紀後半から成立した政治体制は、疑いなく完全に成熟した国家なのである。

国家の概念

- **問題点**：現代の立憲国の概念や国家概念、法律概念などが過去に投影されてしまう問題である。

国家形成の過程・日本

● 3世紀中・定型化された前方後円墳→
 中国を手本とした日本の中央集権律令国家の成立過程の出発点の臆説

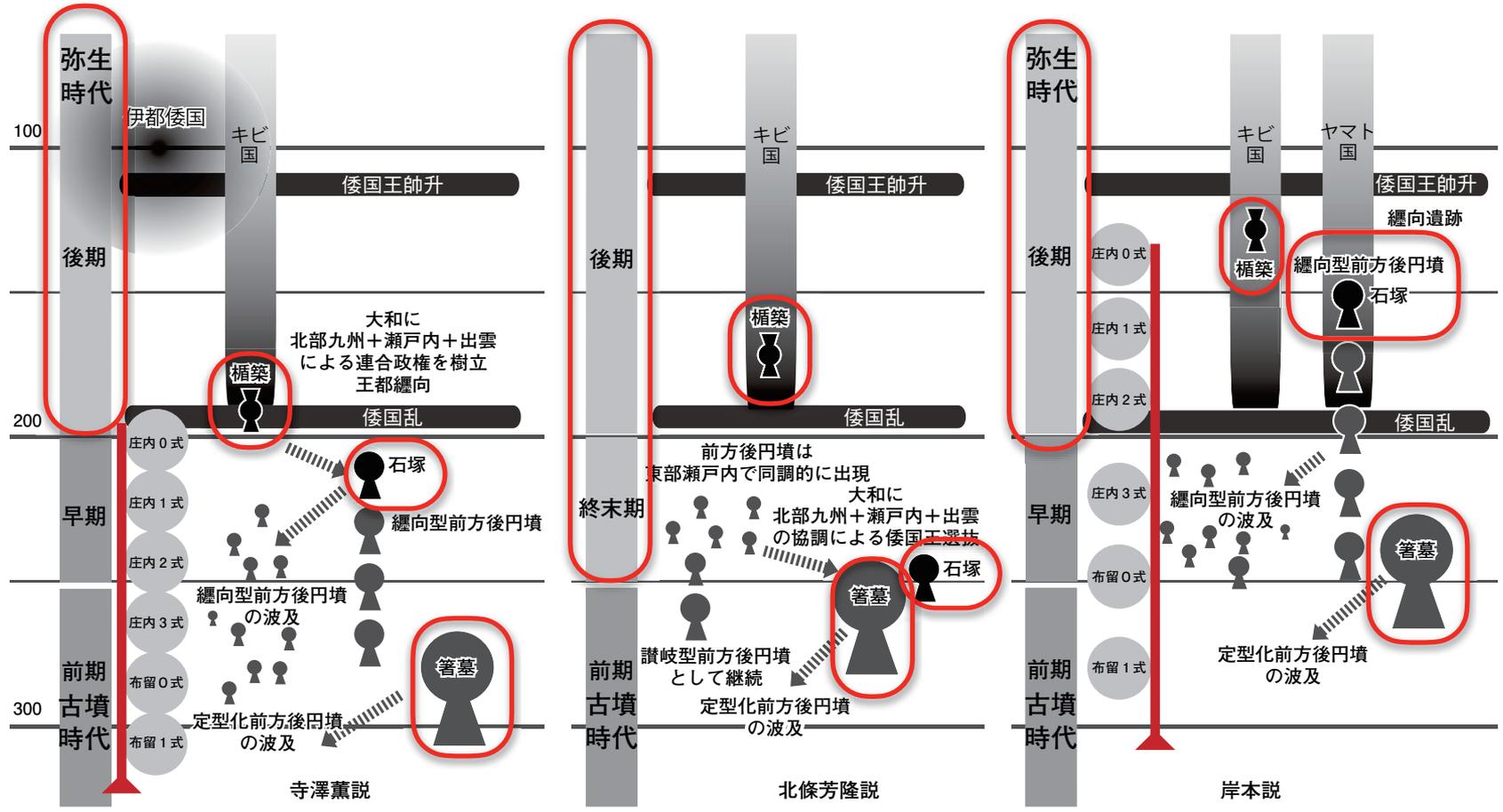


図6 楯築墓と纏向諸墳および纏向型前方後円墳の関係

国家形成の過程・日本

儀式や宗教は国家形成の過程で何の様な役割があるか。

➡ 儀式は、宗教や祭祀と結びついて、
国家形成の過程で重要な役割を果たすものである。

➡ 儀式・宗教と、支配・国家形成との一般的な
関係についても考察していきたい

➡ 秩序形成の要素としての儀式

国家形成の過程・日本

- 論点となるのは、その中で古墳時代のシステムをいかに解釈するかということで、これは、畿内中核とその周辺との政治的関係をいかに評価するかに関係している。
- 沖ノ島のような遺跡は、時々の見解の違いによって、異なった判断がなされてしまうということである。
- つまり、さまざまなモデル、あるいは、最初の定型化した前方後円墳から後の中央集権の律令国家の間にあたるこの時期を扱った文献から、
- 国家の形成過程や支配、それに関連する社会的政治的構造をいかに定義するかによって、見解が変わるのである。
- 対岸にある宗像市の古墳群と沖ノ島との関係をどう評価するのかにも関連してくる。

社会構造と支配 – 古墳の被葬者の役割 と性格について – 神聖王権、祭司王

- 埋葬儀礼や埋葬慣習に見られる共通性を、そのまま逆推論的に上層の政治的統制と結びつけることはできないのだ。

● 古墳で埋葬された人物の役割と性格

- 沖ノ島のように、伝承で伝わる供物を供えた場所や祭祀場がはっきりと確認できたとしても、
 - ➡ それらが王やその支配と関係があったかについては
 - ➡ やはり証明が極めて難しいのだ。

社会構造と支配 – 古墳の被葬者の役割 と性格について – 神聖王権、祭司王

- 古墳で埋葬された人物の役割と性格



- 考古学者白石氏は、**神まつりと古墳祭祀には違いがある**
➡ 「古墳被葬者は祭司であっても神そのものとするのは困難でる」

- **古墳時代前期から律令国家成立期に至る過程の中での神まつりの変遷問題**
- 今尾氏は、状況から、彼らが儀式で指導的役割を担い、おそらく祭司の役割をしていたことと考えられる

- 広瀬氏の古墳被葬者の神格化の説

社会構造と支配 – 古墳の被葬者の役割 と性格について – 神聖王権、祭司王

- 広瀬氏の古墳被葬者の神格化の説



- エウロパのケルト部族の祭祀場からは、ケルト時代であれ、ラ・テーヌ期であれ、ローマ帝国時代であれ、共同体が祭礼の担い手であったと想定できるが、
- 王あるいはそれに類似した支配者的な監督のような存在が前面あるいは背後にいたのかが問題になってくる。



➡ 考古学的にも確認するのが困難である。

社会構造と支配 – 古墳の被葬者の役割 と性格について – 神聖王権、祭司王

- 神聖王権か
- 神聖性のある王権(神聖的王権)

- 神と祭司王の支配が神聖だとする考えは、もちろん地域ごとに特徴はあるものの明らかに**世界的な現象**である。



- オットー3世 (神聖ローマ皇帝)
- 中世ドイツの王(在位:983年12月 - 1002年)



神の世界

支配者の世界

官僚の世界

冠がある二人物は支援する

2人の世俗的な高官と2人の大司教

- 神聖王権か
- 神聖性のある王権(神聖的王権)

- 支配者の神聖化の最も印象的な文書と考えられています。
- 皇帝はキリストに近い立場

→ 支配者は女性で運ばれ、
→ 頭で神の球体に突き出ています。

→ 神の手は彼に冠を寄付します。

- 10世紀にドイツのライヒェナウ島で筆写。
「リウタールの福音書」ザクセン朝オットー3世時代の代表的写本で、僧 Liuthar がポーデン湖の島に造られた。

- オットー3世 (神聖ローマ皇帝)・中世ドイツの王(在位:983年12月 - 1002年)

儀式のカー儀式と宗教のコンテクストから 見た国家形成と支配ー

➡ 秩序形成の要素としての儀式

- たしかに、儀式だけでは国家は形成されない。

- しかし、儀式は、秩序を作りそれを永続させることのできる重要な活動のひとつである。

- 儀式は、公開性と荘厳さ、また文献で何度も強調される自由意志のおかげで、たい
てい読み書きのできない人々をなににもまして結束させることができたのだ。

儀式のカー儀式と宗教のコンテクストから 見た国家形成と支配ー

- 宗教と結びつくと、儀式は政治的統一や支配の安定化への結合力として働くことができる。
- 儀式は宗教的共同体の設立の際にも重要な役割を果たす。
- つまり、宗教性を誘起させ、信者たちの集団の制度化の誘因となりそれを推し進めて支える働きをすることができるのだ。
- そのため、儀式は宗教の制度化になくてもはならないものである。
- さらに仮定できるのは、宗教的共同体は制度化なしでは長続きすることができないことと、制度化に貢献した儀式のおかげでその存続と継続が保証されたということである。
- 共同体の設立や他と区別をつけることでの集団アイデンティティの確保という意味で、儀式は、宗教的認定や内外の規約、社会政治的秩序のために貢献したのだ。

儀式のカー儀式と宗教のコンテクストから 見た国家形成と支配ー

- ヨーロッパの中世前期の国家性について考察するとき、
 - ➡キリスト教が国家形成の過程でその根本となる要素として、
 - ➡また、支配の確立とその維持において非常に重要な役割を持っていたことがわかる。

- 日本での国家形成の過程における**仏教**が同じ役割を持っていたことがわかる。

プライマリー宗教とセカンダリー宗教

- なぜキリスト教や仏教のような世界宗教が伝統的な社会においてそのような魅力を行使できたのであろうか。

- プライマリー宗教とセカンダリー宗教の宗教システム間の内容の違いである。プライマリー宗教は、儀式、礼拝や伝統に根ざした宗教であるともいえ、ヤン・アスマンによると、同じ文化と社会、たいていは同じ言語を持つ人々の間で数百年、数千年かけて歴史的に育まれたものであり、それらと切り離すことができないものである。また、これらの宗教は伝統に起因しているが、その伝統は、世界的事件を思い起こさせる神話的太古を根拠にしている。そして、その起源について何度も繰り返し語るのものである。世界の発展などの目的論的な概念は無く、個人や人々の「救済」や「悟り」を目指す終末論的な目的もない。プライマリー宗教は、それぞれの文化と結びつき、状況に合わせて、神々との調和的關係などといったさまざまな関係を作りだすのである。

- セカンダリー宗教は、世界はひとつの秩序に支配されているという観念に導かれ、正義の原則を基礎としている。それはキリスト教では最後の審判の思想の中に、仏教ではカルマなどの中に見られるのもので、善と悪とを清算する約束を含んでいる。こうした概念が、道徳的な規範へと繋がっていく。その際、決定的な要素となったのが、文化を伝える最も重要で新しいメディアとしての書物である。いわゆる書物宗教であるセカンダリー宗教は、神聖な書物、歴史的な創立者の人物像、信仰内容などを明確に確立していることにおいて傑出している。アスマンによると、書物のないセカンダリー宗教は存在しえない。書物のおかげで、その教えを広めたり指導者や神学者として解説をしたりイデオロギー的に活動できる宗教の専門家が生まれたのである。彼らは宗教の内容の伝達者というだけでなく、儀式の挙行に重点をおく媒体となった。書かれた教えは宗教の次元を広げ、その万人救済主義的な望みも広げていった。このことは、教会や修道院にみられるような地域を超えた組織の構造と結びついている

プライマリー 宗教

ドイツ考古学者ヤン・アスマンによる

セカンダリー 宗教

宗教的儀式、礼拝・
伝統に根ざした宗教(神道など)

キリスト教・仏教・回教

同じ文化と社会、たいていは同じ言語
を持つ人々の間で数百年、数千年かけて
歴史的に育まれたもの

➡ 世界的宗教

➡ 地域的宗教

◎ 文字で書かれた道徳的な
規範・書くことの重要性

➡ 書物宗教「**経典**」
◎ 聖書・コーラン・仏書

➡ 神聖な書物、歴史的な創立
者の人物像、信仰内容など

➡ 書物のないセカンダリー宗教は
存在しえない

◎ 宗教は伝統に起因している

➡ 世界的事件を思い起こさせる
神話的太古を根拠にしている

➡ 起源について何度も繰り返し語る

プライマリー 宗教

宗教の内容の伝達者というだけが多い

➡ 口頭伝承が多い

- ◎ 世界の発展などの目的論的な概念は無く、個人や人々の「救済」や「悟り」を目指す終末論的な目的もない

➡ 文化と結びつき、状況に合わせて、神々との調和的關係

➡ 自然の中の祭祀場

➡ 沖ノ島の祭祀

セカンダリー 宗教

書物のおかげで、その教えを広めたり指導者や神学者として解説をしたりイデオロギー的に活動できる宗教の専門家が生まれたのである。

➡ 布教師・布教

- ◎ 書かれた教えは宗教の次元を広げ、その万人救済主義的な望みも広げていった

➡ 教会や修道院にみられるような地域を超えた組織の構造と結びついている



➡ 区間の支配

セカンダリー宗教の区間の支配・仏教



筑前国分寺、福岡県太宰府市

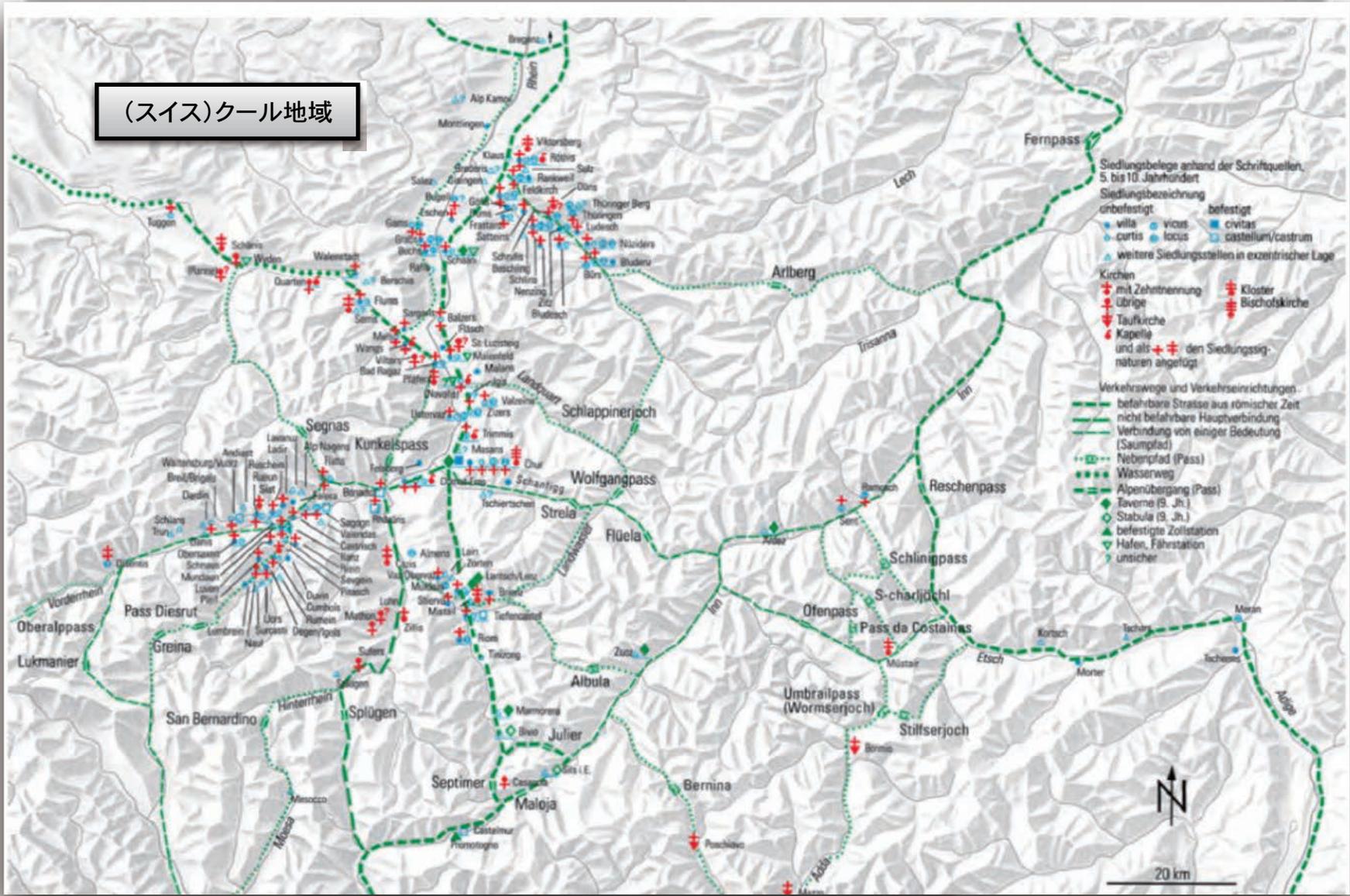
➔ 建物・モニュメント

4 古代の行政区分



国府・国分寺跡地図(山川 詳説
日本史図録より)

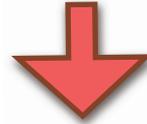
セカンダリー宗教の区間の支配・エウロパ前期中世のキリスト教



プライマリー
宗教

仏教前の信仰

➡ 形がない器



➡ 仏教の影響の上に神道
➡ 建物化（宮島など）・場所



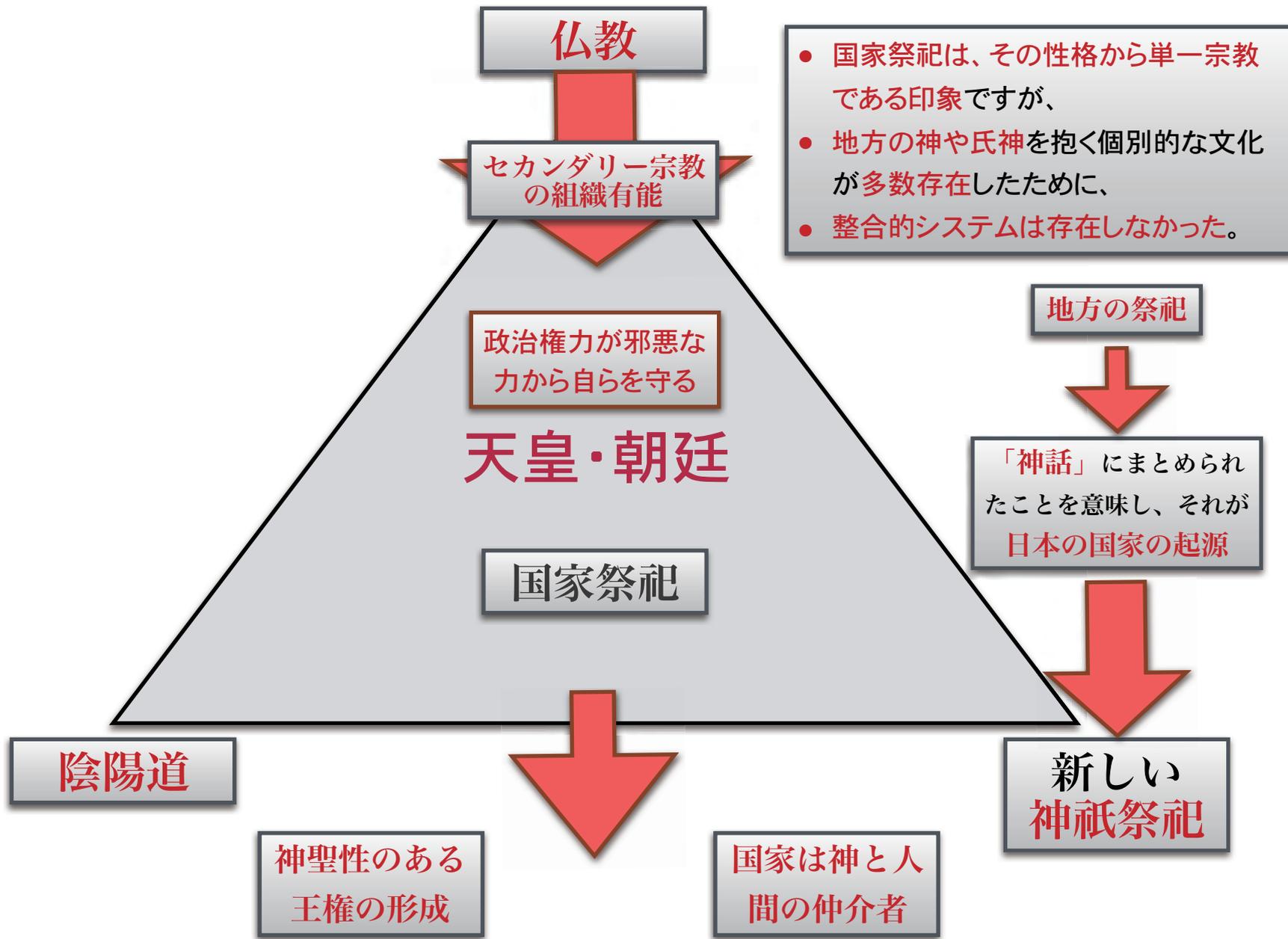
➡ 明治から国家神道・相識・
儀礼的形

日本列島の国家形成における宗教と儀式

- 朝廷は、地方の祭祀を天皇の普遍的な「神祇」祭祀に組み込むことで、地方の権力を吸収した。実際、このことは、最も重要な神々が新しい朝廷の物語、つまり「神話; mytho-history」にまとめられたことを意味し、それが日本の国家の起源を作り出した。また、朝廷が領土全域にわたって、神への奉納をする権限を引き受けたことも意味している。この物語と儀式の挙行によって、私たちが神祇祭祀と呼ぶ新しい祭祀システムが完成したのだ。
- 儀式とその成立が中央政権国家への戦略上重要な一歩であったことがわかる。古いものと新しいものとの間の、地域的な、また地域を超えた儀式的コミュニケーションが成立し、秩序を作り出され、それに伴って官僚化と統一化もなされた。しかし、朝廷セレモニーの中の神祇祭祀のもうひとつの重要な要素、仏教がなくてはこのことは成し遂げられなかったであろう。

- 国家祭祀は、その性格から単一宗教である印象を持たせようとしたものの、地方の神や氏神を抱く個別的な文化が多数存在したために、それらが一緒になって一つの宗教システムだとはっきり思えるような、整合的システムは存在しなかったのである。

- この神祇祭祀と陰陽道、仏教の3つは、政治権力が邪悪な力から自らを守るために利用した主要な要素である。天皇を中心にすえ、仏教や道教、仏教以前の祭祀の要素をうまく融合させることで、これまで定義してきた神聖性のある王権の形成ができたといえるだろう。国家は入念に組織されたヒエラルヒー的な国家祭祀の助けを借りて、神と人間の仲介者となった。その役職から得られた天皇の神聖性は、ますます国家祭祀の中心へ移行していく。



- 国家祭祀は、その性格から単一宗教である印象ですが、
- 地方の神や氏神を抱く個別的な文化が多数存在したために、
- 整合的システムは存在しなかった。

結論

- 儀式が宗教と祭祀と結びついて、
国家形成の過程で重要な役割を果たしたことは、一般に認められている。
- また儀式は、原史・古代の社会にみられるように政体や国家の中でその設立を
助け安定に寄与する秩序形成の要素として機能する。
 - 日本の国家形成の間でおそらく最も重要だったのが、
大陸との交易だったであろう。
- この交易では、海路に依存するしかなかったので、
 - 大陸との交流がもっとも盛んだった頃に、
➡ 沖ノ島の祭祀がこの交流の過程に付随した儀式として行われ、
それを支援していたと仮定することができる。

- 国家形成の過程における儀式的・宗教的側面では、キリスト教や仏教といった普遍的な望みを持つセカンダリーな書物宗教の方が、
➡ よりも大きな影響力を持ってきた。

➡ 整合的システムを持たず統合力のないプライマリー宗教

- しかしながら、以前から存在してきた宗教観や儀式、儀式の場と結びつき、それらに適応して変化し、
➡ 新しい融合宗教を作り出すことが、トランスパーソナル的なアイデンティティや人と人との繋がり意識や政体の象徴的なコミュニケーション要素などを作り出すための国家権力の重要な戦略だったのである。